

# 感染症発生動向調査事業における宮崎県の患者発生状況 —2012年(平成24年)—

境田昌江 三浦美穂<sup>1)</sup> 吉野修司<sup>1)</sup> 大浦裕子<sup>1)</sup> 竹井正行

## Summary of the 2012 Annual Report According to the National Epidemiological Surveillance of Infectious Diseases in Miyazaki Prefecture.

Masae SAKAIDA, Miho MIURA, Shuji YOSHINO, Yuko OHURA, Masayuki TAKEI

### 要旨

2012年に宮崎県内では全数把握対象75疾患中、19疾患が報告された。疾患別では結核263例、腸管出血性大腸菌感染症67例、つつが虫病50例の報告が多かった。つつが虫病は前年の約1.9倍に増加した。また、2012年は麻しんの報告が8例あった。麻しんが全数把握になった2008年に次いで報告が多く、この8例は疫学的なリンクが確認された。

定点把握対象疾患のうちインフルエンザ及び小児科対象疾患については、報告総数が前年及び例年の約9割、全国の約1.6倍であった。眼科及び基幹定点報告疾患の報告総数は、前年の約8割、例年と同程度、全国の約1.3倍であった。月報告対象疾患の性感染症の報告総数は、前年の約8割、例年及び全国の約7割であった。薬剤耐性菌感染症の報告総数は、前年及び例年の約9割、全国と同程度であった。

キーワード：感染症発生動向調査事業、宮崎県、全数把握、定点把握

### はじめに

当所では、1999年(平成11年)より宮崎県感染症情報センターとして、感染症発生動向調査事業に基づいて感染症情報の収集と解析を行ってきた。解析した情報は週報や月報として医療機関や県民に還元し、感染症の拡大防止や公衆衛生の向上に努めている。

今回、宮崎県における2012年(平成24年)の患者発生状況をまとめたので報告する。

### 調査方法

#### 1 対象疾患及び定点医療機関

「感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律(以下「感染症法」という。)」で定められた105疾患を調査対象とした。

指定届出医療機関(以下「定点」という。)は、感染症発生動向調査事業実施要綱<sup>1)</sup>に基づき選定した(表1)。

#### 2 調査期間

全数把握対象疾患については2012年1月1日から12月31日まで、定点把握対象疾患については2012年1週から52週まで、インフルエンザについては2012/2013年シーズンの2012年41週から2013年14週までをそれぞれ調査期間とし、いずれの疾患も報告日をもとに集計した。

表1 保健所別指定届出医療機関(定点)数

保健所名	定点種別				
	インフルエンザ	小児科	眼科	基幹	STD
宮崎市	16	10	3	1	4
都城	10	6	2	1	2
延岡	7	4	1	1	2
日南	5	3		1	1
小林	5	3		1	1
高鍋	6	4		1	2
高千穂	2	1			
日向	6	4		1	1
中央	2	1			
計	59	36	6	7	13

## 結果

### 1 全数把握対象疾患の発生状況

#### 1)一類感染症

報告はなかった。

#### 2)二類感染症

結核 263 例が報告された。

##### a)結核 Tuberculosis

報告数は 263 例で、前年と同程度であった。肺結核が 107 例、その他の結核(結核性胸膜炎、腸結核、結核性リンパ節炎等)が 45 例、肺結核及びその他の結核が 7 例、疑似症患者が 28 例、無症状病原体保有者が 76 例であった。宮崎市(139 例)、都城(36 例)、延岡(28 例)保健所からの報告が多かった。男性が 137 例、女性が 126 例で、70 歳以上が 128 例と全体の約半数を占めており、高齢者の割合が高い。また、30 歳代・40 歳代・50 歳代・60 歳代もそれぞれ全体の約 1 割を占めた。

#### 3)三類感染症

腸管出血性大腸菌感染症 67 例が報告された。

##### a)腸管出血性大腸菌感染症

###### Enterohemorrhagic *Escherichia coli* infection

報告数は 67 例で、前年と同程度であった。患者が 29 例(うち HUS 発症例はなし)、無症状病原体保有者が 38 例であった。O 血清型別では、O111 が 18 例、O157 が 17 例、O26 が 15 例、O103 が 11 例と多かった(表 2)。宮崎市(44 例)、都城(16 例)、高鍋(5 例)、日向(2 例)保健所からの報告で、年齢別では、1 歳から 4 歳が 33 例(全体の約半数)、

表 2 O 血清型別報告数

O 血清型	報告数
O111	18
O157	17
O26	15
O103	11
O91	1
O142	1
O74	1
OUT	4
計	68 ※

※同一人から 2 種類の型が検出された例があるため報告数より多い。

次いで 30 歳代が 11 例と多く、これは 1 歳から 4 歳児の同居家族が多くを占めた。

発生月は 4 月から 11 月で、特に 8 月(35 例)と 9 月(13 例)で全体の約 7 割を占めた。これは集団感染事例の影響によるものである。

#### 4)四類感染症

E 型肝炎 2 例、A 型肝炎 3 例、つつが虫病 50 例、デング熱 2 例、日本紅斑熱 9 例、レジオネラ症 6 例、レプトスピラ症 3 例が報告された。

##### a)E 型肝炎 Hepatitis E

報告数は 2 例で、宮崎市・日南(各 1 例)保健所からの報告であった。40 歳代の男性と 60 歳代の男性で、主な症状として全身倦怠感、食欲不振、黄疸、肝機能異常等がみられた。

##### b)A 型肝炎 Hepatitis A

報告数は 3 例で、宮崎市(2 例)、延岡(1 例)保健所からの報告であった。50 歳代の女性が 2 例と 60 歳代の女性が 1 例で、主な症状として全身倦怠感、発熱、食欲不振、肝機能異常等がみられた。

##### c)つつが虫病

###### Scrub typhus (Tsutsugamushi disease)

報告数は 50 例で、前年(26 例)の約 1.9 倍であった。都城(16 例)、宮崎市(11 例)保健所からの報告が多く、季節的には例年どおり冬季に多発した。男性が 26 例、女性が 24 例で、50 歳以上が 42 例と全体の約 8 割を占めた。野外作業中による感染が多く、主な症状として頭痛、発熱、発疹、刺し口などがみられた。

##### d)デング熱 Dengue fever

報告数は 2 例で、宮崎市保健所からの報告であった。患者はいずれも 20 歳代で、発熱、全身の筋肉痛、発しん、血小板の減少等の症状がみられた。ともに東南アジアへの渡航歴があった。

##### e)日本紅斑熱 Japanese spotted fever

報告数は 9 例で、宮崎市(7 例)、日南(2 例)保健所からの報告であった。発生月は 5 月から 11 月であった。男性が 3 例、女性が 6 例で、70 歳以上が 6 例、40 歳代から 60 歳代が 3 例であった。主な症状として発熱、刺し口、発疹、DIC、肝機能異常等がみられた。

##### f)レジオネラ症 Legionellosis

報告数は6例で全て肺炎型であった。宮崎市(3例)、都城・日南・高鍋(各1例)保健所からの報告であった。全て男性で、50歳代が2例、60歳代が3例、80歳代が1例であった。主な症状として発熱、肺炎、下痢、多臓器不全等がみられた。

#### g)レプトスピラ症 *Leptospirosis*

報告数は3例で、宮崎市・都城・日南(各1例)保健所からの報告であった。全て男性で、60歳代が2例、70歳代が1例であった。主な症状として発熱、黄疸、腎不全等がみられた。

### 5)五類感染症

アメーバ赤痢4例、ウイルス性肝炎4例、急性脳炎9例、クロイツフェルト・ヤコブ病2例、劇症型溶血性レンサ球菌感染症2例、後天性免疫不全症候群3例、ジアルジア症1例、梅毒4例、破傷風5例、麻しん8例が報告された。

#### a)アメーバ赤痢 *Amebic dysentery*

報告数は4例で、腸管アメーバ症が1例、腸管外アメーバ症が2例、腸管及び腸管外アメーバ症が1例であった。宮崎市(3例)、小林(1例)保健所からの報告で、全て男性であった。40歳代・50歳代が各1例、60歳代が2例で、主な症状として下痢、発熱、肝膿瘍等がみられた。

#### b)ウイルス性肝炎 *Viral hepatitis*

報告数は4例で、全て宮崎市保健所からの報告であった。いずれもB型肝炎ウイルスが原因で、全て男性であった。20歳代が2例、30歳代・50歳代が各1例で、主な症状として肝機能異常、全身倦怠感、黄疸等がみられた。

#### c)急性脳炎 *Acute encephalitis*

報告数は9例で、全て宮崎市保健所からの報告であった。男子3例、女子6例で、0歳(7ヶ月・11ヶ月)が2例、1~4歳が5例、5~9歳が2例であった。原因病原体はインフルエンザウイルスAH3が2例、水痘帯状疱疹ウイルス・ロタウイルスが各1例、不明が5例であった。主な症状として発熱、痙攣、意識障害等がみられた。

#### d)クロイツフェルト・ヤコブ病

##### *Creutzfeldt-Jakob disease*

報告数は2例で、古典型クロイツフェルト・ヤコブ病であった。全て宮崎市保健所からの報告で、

50歳代・60歳代が各1例、男性と女性が各1例であった。主な症状として進行性認知症、ミオクローヌス、錐体路症状等がみられた。

#### e)劇症型溶血性レンサ球菌感染症

##### *Severe invasive streptococcal infections*

報告数は2例で、全て宮崎市保健所からの報告であった。40歳代・60歳代が各1例で、いずれも男性であった。血清群はA群とB群が各1例であった。主な症状としてショック、腎不全、急性呼吸窮迫症候群、DIC等がみられた。

#### f)後天性免疫不全症候群

##### *Acquired immunodeficiency syndrome*

報告数は3例で、AIDSが1例(指標疾患:非ホジキンリンパ腫)、無症候性キャリアが2例であった。宮崎市(2例)、延岡(1例)保健所からの報告で、全て男性であった。20歳代・40歳代・50歳代が各1例で、感染経路は異性間性的接触が2例、不明が1例であった。

#### g)ジアルジア症 *Giardiasis*

報告数は1例で宮崎市保健所からの報告であった。20歳代の女性で、感染地域はネパールで現地にて診断された。主な症状は下痢であった。

#### h)梅毒 *Syphilis*

報告数は4例で、全て宮崎市保健所からの報告であった。早期顕症I期・無症候性が各1例、早期顕症II期が2例で、男性が3例、女性が1例であった。30歳代が2例、20歳代・60歳代が各1例で、感染経路は異性間性的接触が3例、不明が1例であった。主な症状として梅毒性バラ疹、硬性下疳等がみられた。

#### i)破傷風 *Tetanus*

報告数は5例で、宮崎市(3例)、都城(2例)保健所からの報告であった。男性2例、女性3例で、80歳代が2例、60歳代・70歳代・90歳代が各1例であった。主な症状として筋肉のこわばり、開口障害、嚥下障害、強直性けいれん等がみられた。

#### j)麻しん *Measles*

報告数は8例で、全数把握対象となった2008年に次いで多かった。この8例は疫学的なリンクが確認された<sup>2)</sup>。なお初発患者は海外(タイ)に渡航歴があった。病型別では、麻しんが5例、修飾麻しんが3例であった(全例が検査診断例)。遺伝

子型は全て D8 型であった。宮崎市(6 例), 日向(2 例)保健所からの報告で, 10 歳未満が 1 例, 10 歳代・20 歳代が各 2 例, 30 歳代が 3 例であった。男性が 3 例, 女性が 5 例であった。ワクチン接種歴は無しが 5 例, 1 回有りが 2 例, 不明が 1 例であった。

## 2 点把握対象疾患の発生状況

### 1) インフルエンザ及び小児科対象疾患

報告総数は 60,039 人(定点あたり 1,498.6)で, 前年の 86%, 過去 5 年間の平均値(以下, 例年)の 93%, 全国の 161%であった。

各疾患の発生状況の概要を表 3, 経時的発生状況を図 1 に示した。その概略は以下のとおりであった。

#### a) インフルエンザ Influenza

2012/2013 年シーズンの報告総数は, 15,617 人(定点当たり 264.7)で, 前シーズンの 8 割, 例年の 7 割, 全国の 1.2 倍であった。流行の時期は例年通りで, 2013 年第 3 週(1 月中旬)に定点あたり 26.8 と流行注意報レベルを超過し, 翌週の第 4 週(1 月下旬)には定点あたり 38.3 と流行警報レベル開始基準値を超えた。第 5 週で定点あたり 40.7 と流行のピークを迎えたあと, 第 14 週(4 月上旬)に終息基準値を下回った。今シーズンの流行の中心となったウイルスは A 香港型(AH3)で, 後半は B 型による患者も確認された。保健所別では小林(395.4), 延岡(343.1), 日南(323.4)保健所の順に報告が多く, 0-5 歳が 33%, 6-9 歳が 21%, 10-14 歳が 18%, 15-19 歳が 5%, 20 歳以上が 23%を占めた。

#### b) R S ウイルス感染症

##### Respiratory syncytial virus infection

報告総数は 2,355 人(定点あたり 65.4)で, 前年の 1.1 倍, 例年の 1.3 倍, 全国の 2.1 倍であった。延岡(115.5), 日向(98.3), 宮崎市(76.4)保健所からの報告が多く, 年齢別では 1 歳が最も多く全体の約 4 割, 2 歳以下では約 9 割を占めた。

#### c) 咽頭結膜熱 Pharyngoconjunctival fever

報告総数は 1,373 人(定点あたり 38.1)で, 前年の 1.1 倍, 例年の 1.4 倍, 全国の 2.2 倍であった。日南(153.0), 延岡(91.0)保健所からの報告が多く,

6 ヶ月から 4 歳が約 8 割を占めた。

#### d) A 群溶血性レンサ球菌咽頭炎

##### Group A streptococcal pharyngitis

報告総数は 4,522 人(定点あたり 125.6)で, 前年の 9 割, 例年の 1.1 倍, 全国の 1.4 倍であった。延岡(399.3), 高鍋(144.5)保健所からの報告が多く, 3 歳から 6 歳が全体の約 6 割を占めた。

#### e) 感染性胃腸炎 Infectious gastroenteritis

報告総数は 22,729 人(定点あたり 631.4)で, 前年の 1.2 倍, 例年の 1.1 倍, 全国の 1.6 倍であった。2012 年第 3 週(1 月中旬)に流行警報レベル開始基準値を超過し, 第 6 週(2 月上旬)に終息基準値を下回った。また, 2012/2013 シーズンは例年より流行の時期が早く, 2012 年 45 週(11 月上旬)に流行レベル開始基準値を超えた。小林(1291.3), 日南(891.7), 都城(713.0)保健所からの報告が多く, 1 歳から 3 歳が約 4 割を占めた。

#### f) 水痘 Chickenpox

報告総数は 4,118 人(定点あたり 114.4)で, 前年及び例年の 8 割, 全国の 1.8 倍であった。延岡(181.0), 小林(145.0)保健所からの報告が多く, 1 歳から 4 歳が全体の約 8 割を占めた。

#### g) 手足口病 Hand, foot and mouth disease

報告総数は 2,252 人(定点当たり 62.6)で, 前年の 4 割, 例年の 6 割, 全国の 2.7 倍であった。流行の時期は例年より遅く, 第 39 週(9 月下旬)に流行警報レベル開始基準値を超過し, 第 46 週(11 月中旬)に終息基準値を下回った。延岡(93.5), 日南(83.3)保健所からの報告が多く, 6 ヶ月から 3 歳が全体の約 9 割を占めた。

#### h) 伝染性紅斑 Erythema infectiosum

報告総数は 127 人(定点あたり 3.5)で, 前年の 1 割, 例年の 2 割, 全国の半数であった。延岡(7.3)保健所からの報告が多く, 4 歳から 6 歳が全体の約 4 割を占めた。

#### i) 突発性発しん Exanthem subitum

報告総数は 2,041 人(定点あたり 56.7)で, 前年及び例年と同程度, 全国の 2 倍であった。延岡(94.8), 日南(62.7)保健所からの報告が多く, 6 ヶ月から 1 歳が全体の約 9 割を占めた。

#### j) 百日咳 Pertussis

報告総数は 14 人(定点あたり 0.39)で, 前年の 8



割, 例年の 1 割, 全国の 3 割であった。1 歳以下が 5 人, 2~5 歳が 3 人, 6~9 歳が 1 人, 10~14 歳が 4 人, 20 歳以上が 1 人であった。

#### k) ヘルパンギーナ Herpangina

報告総数は 3,176 人(定点あたり 88.2)で, 前年と同程度, 例年の 1.3 倍, 全国の 2.4 倍であった。流行の時期は例年通りで, 第 26 週(6 月下旬)において流行警報レベル開始基準値を超過し, 第 35 週(8 月下旬)に終息基準値を下回った。延岡(225.5), 日南(113.0)保健所からの報告が多く, 6 ヶ月から 3 歳が約 8 割を占めた。

#### l) 流行性耳下腺炎 Mumps

報告総数は 1,712 人(定点あたり 47.6)で, 前年の 4 割, 例年の 6 割, 全国の 2.1 倍であった。都城(103.3), 中央(101.0)保健所からの報告が多く, 2 歳から 6 歳が全体の約 7 割を占めた。

### 2) 眼科及び基幹定点報告疾患

眼科定点把握対象疾患の報告総数は 557 人(定点あたり 92.8)で, 前年の 77%, 例年の 89%, 全国の 313%であった。

基幹定点把握対象疾患の報告総数は 114 人(定点あたり 16.3)で, 前年の 116%, 例年の 160%, 全国の 30%であった。

#### a) 急性出血性結膜炎

##### Acute hemorrhagic conjunctivitis

報告総数は 4 人(定点あたり 0.67)で, 例年の 2.2 倍, 全国と同程度であった(前年は報告なし)。患者は 10 歳代から 40 歳代であった。

#### b) 流行性角結膜炎

##### Epidemic keratoconjunctivitis

報告総数は 553 人(定点あたり 92.2)で, 前年の 8 割, 例年の 9 割, 全国の 3.2 倍であった。20 歳代から 40 歳代が全体の約半数を占めた。

#### c) 細菌性髄膜炎 Bacterial meningitis

報告総数は 4 人(定点あたり 0.57)で, 前年の 1.3 倍, 例年及び全国の 6 割であった。宮崎市(3.0), 都城(1.0)保健所からの報告で, 5 歳から 9 歳が 3 人, 70 歳以上が 1 人であった。原因菌は *Stenotrophomonas maltophilia* が 1 人, 不明が 3 人であった。

#### d) 無菌性髄膜炎 Aseptic meningitis

報告総数は 12 人(定点あたり 1.7)で, 前年の 8 割, 例年の 7 割, 全国の 9 割であった。宮崎市(6.0), 延岡(3.0), 都城(2.0), 小林(1.0)保健所からの報告で, 0 歳・10-14 歳が各 4 人, 5-9 歳が 2 人, 1-4 歳・50 歳代が各 1 人であった。原因病原体は, *Mycoplasma pneumoniae*, Mumps virus が各 2 人, 不明が 8 人であった。

#### e) マイコプラズマ肺炎

##### Mycoplasmal pneumonia

報告総数は 95 人(定点あたり 13.6)で, 前年の約 1.4 倍, 例年の 2.5 倍, 全国の 3 割であった。延岡(38.0), 高鍋(21.0)保健所からの報告が多く, 1-4 歳が全体の約 4 割, 5-9 歳が約 3 割を占めた。

#### f) クラミジア肺炎 Chlamydial pneumonia

報告総数は 3 人(定点あたり 0.43)で, 前年の 3 割, 例年の 4 割, 全国の 2 割であった。高鍋(3.0)保健所からの報告で, 1-4 歳が 1 人, 5-9 歳が 2 人であった。

### 3) 月報告対象疾患

性感染症の報告総数は 443 人(定点あたり 34.1)で, 前年の 83%, 例年の 73%, 全国の 69%であった。

薬剤耐性菌感染症の報告総数は 396 人(定点あたり 56.6)で, 前年の 93%, 例年の 87%, 全国の 103%であった。

#### a) 性器クラミジア感染症

##### Genital chlamydial infection

報告総数は 270 人(定点あたり 20.8)で, 前年の 9 割, 例年及び全国の 8 割であった。都城(38.0)保健所からの報告が多かった。男性が約 5 割, 女性が約 5 割で, 20 歳代が全体の約 4 割, 30 歳代が約 3 割を占めた。

#### b) 性器ヘルペスウイルス感染症

##### Genital herpetic infection

報告総数は 80 人(定点あたり 6.2)で, 前年の 1.2 倍, 例年の 9 割, 全国の 7 割であった。日向(17.0)保健所からの報告が多かった。男性が約 2 割, 女性が約 8 割で, 20 歳代が約 3 割, 30 歳代・40 歳代がそれぞれ約 2 割を占めた。

#### c) 尖圭コンジローマ Condyloma acuminatum

報告総数は 23 人(定点あたり 1.8)で, 前年及び

例年の 6 割, 全国の 3 割であった。宮崎市(4.3)保健所からの報告が多かった。男性が約 8 割, 女性が約 2 割で, 30 歳代が全体の約 4 割を占めた。

#### d)淋菌感染症 Gonorrhoea

報告総数は 70 人(定点あたり 5.4)で, 前年, 例年及び全国の 6 割であった。都城(8.5)保健所からの報告が多かった。男性が約 9 割, 女性が約 1 割で, 20 歳代・30 歳代がそれぞれ全体の約 3 割を占めた。

#### e)メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症

##### Methicillin-resistant *Staphylococcus aureus* infection

報告総数は 356 人(定点あたり 50.9)で, 前年及び例年と同程度, 全国の 1.1 倍であった。70 歳以上が全体の約 6 割を占めた。

#### f)ペニシリン耐性肺炎球菌感染症

##### Penicillin-resistant *Streptococcus pneumoniae* infection

報告総数は 23 人(定点あたり 3.3)で, 前年の 3 割, 例年の 2 割, 全国の 4 割であった。4 歳以下が全体の約半数, 70 歳以上が約 4 割を占めた。

#### g)薬剤耐性緑膿菌感染症

##### Multidrug-resistant *Pseudomonas aeruginosa* infection

報告総数は 17 人(定点あたり 2.4)で, 前年の 1.6 倍, 例年の 2.4 倍, 全国の 2.9 倍であった。70 歳以上が 15 人, 60 歳代が 2 人であった。

#### h)薬剤耐性アシネトバクター感染症

##### Multidrug-resistant *Acinetobacter* infection

報告はなかった。

## まとめと考察

全数把握対象疾患のうち, 結核は県内全域かつ 0 歳から 90 歳代まで幅広い年齢層で報告された。年齢別の割合では 70 歳以上が全体の半数を占めているが, 30 歳代・40 歳代・50 歳代・60 歳代もそれぞれが全体の約 1 割を占めており, 今後の動向に注意が必要である。つつが虫病は前年と比較し約 2 倍に増加したが, 増加の要因は不明である。

定点把握疾患のインフルエンザと小児科対象疾患の報告総数は, 前年の 86%, 例年の 93%, 全

国の 161%であった。疾患別にみると特に流行した疾患はなく, RS ウイルス感染症と咽頭結膜熱が例年よりもやや多い程度で, そのほかは例年と同程度若しくは少なかった。

眼科疾患の流行性角結膜炎は, 前年及び例年と比較して少なかったが, 全国の 3 倍と多かった。

基幹定点報告疾患のマイコプラズマ肺炎は, 2012 年の全国の報告数は, 2011 年第 25 週以降同時期と比較して多い状況が続いていた<sup>3)</sup>。本県では 2011 年に引き続き報告数が増加したが, 全国と比較すると 3 割と少なかった。

性感染症の報告総数は前年, 例年及び全国と比較して少なく, 5 年前(2007 年)<sup>4)</sup>の約 6 割と減少している。

調査結果から流行発生時期のずれや, 地域により疾患の流行状況が異なり, 地域的な発生動向調査の重要性が示された。今後も引き続きデータの集積を行い感染症の発生動向に注意していくとともに, 適切な情報の提供と感染予防への啓発は若年齢層及び乳幼児を持つ保護者を中心に行う必要がある。

備考)

感染症発生動向調査事業は, 患者情報と病原体情報から構成されており, 当所において後者は微生物部にて情報が得られている。

## 文献

1) 厚生省保健医療局長通知: 感染症の予防及び感染症患者に対する医療に関する法律の施行に伴う感染症発生動向調査事業の実施について, 平成 11 年 3 月 19 日健医発第 458 号。

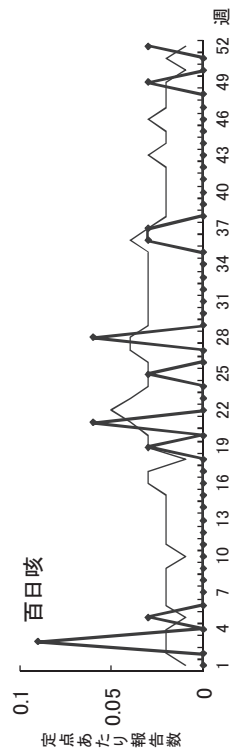
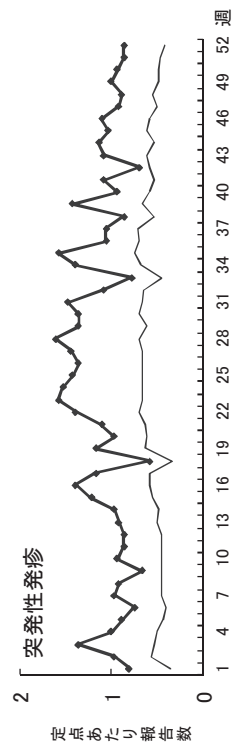
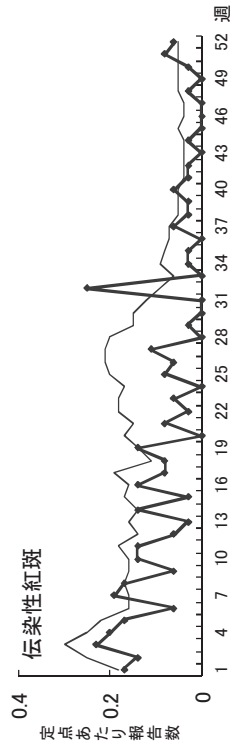
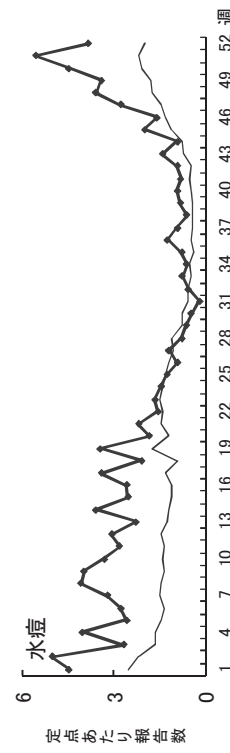
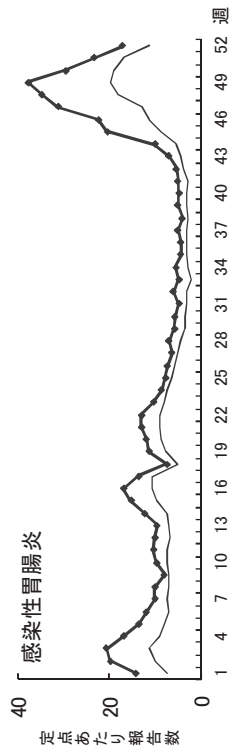
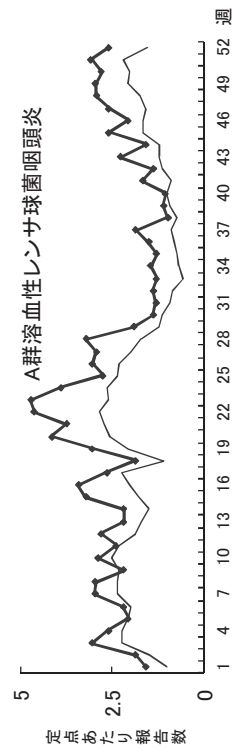
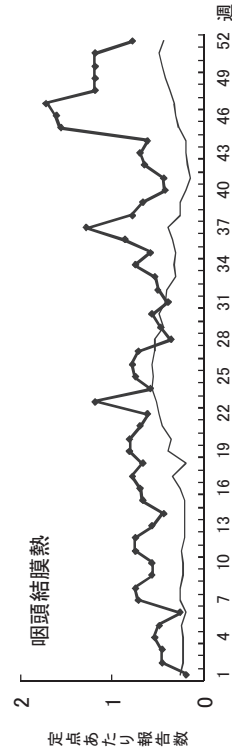
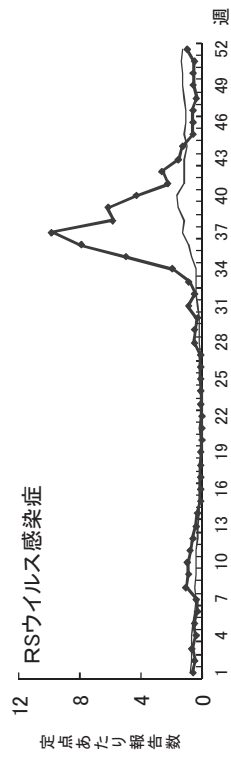
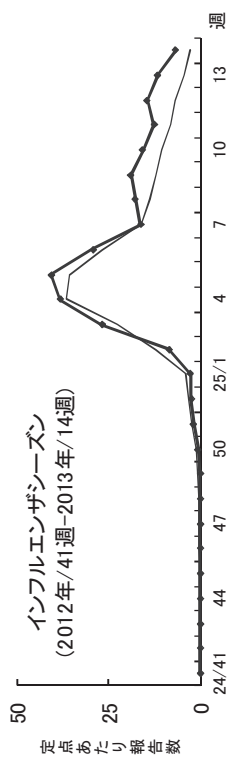
2) 宮崎県健康増進課感染症対策室: 宮崎県における麻しん患者の発生について, 平成 24 年度宮崎県感染症危機管理研修会資料。

3) 国立感染症研究所: 〈注目すべき感染症〉マイコプラズマ肺炎, IDWR2012 年第 39 週, 14(39), 7-9, (2012)。

4) 塩山陽子, 山本正悟, 河野喜美子: 感染症発生動向調査事業における宮崎県の患者発生状況—平成 19 年(2007 年)—, 宮崎県衛生環境研究所報, 19, 41-50, (2007)。

表3 定点把握対象疾患の発生状況の概要（宮崎県，2012年）

疾患名	報告総数	定点あたり 報告数	年齢群別報告数の割合		昨年比 (県内2011年) (%)	過去5年間の 平均との比 (%)	全国比 (2012年) (%)
			好発年齢群	報告総数に 占める割合 (%)			
インフルエンザ	15617	264.7	10歳未満	54	80	73	120
RSウイルス感染症	2355	65.4	2歳以下	92	107	126	210
咽頭結膜熱	1373	38.1	6ヶ月～4歳	77	105	138	224
A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	4522	125.6	3歳～6歳	56	89	113	142
感染性胃腸炎	22729	631.4	1歳～3歳	40	118	111	161
水痘	4118	114.4	1歳～4歳	76	81	81	184
手足口病	2252	62.6	6ヶ月～3歳	89	40	57	270
伝染性紅斑	127	3.5	4歳～6歳	44	5	15	53
突発性発しん	2041	56.7	6ヶ月～1歳	93	99	96	193
百日咳	14	0.4	5歳未満	57	82	12	30
ヘルパンギーナ	3176	88.2	6ヶ月～3歳	81	95	129	242
流行性耳下腺炎	1712	47.6	2歳～6歳	68	44	58	209
急性出血性結膜炎	4	0.7	20歳代～40歳代	75	-	222	95
流行性角結膜炎	553	92.2	20歳代～40歳代	52	76	89	318
細菌性髄膜炎	4	0.6	5歳～9歳	75	133	59	57
無菌性髄膜炎	12	1.7	0歳	33	80	67	87
マイコプラズマ肺炎	95	13.6	10歳～14歳	33	138	250	27
クラミジア肺炎	3	0.4	10歳未満	67	27	35	23
性器クラミジア感染症	270	20.8	10歳未満	100	86	76	82
性器ヘルペスウイルス感染症	80	6.2	20歳代～30歳代	71	119	92	69
尖圭コンジローマ	23	1.8	20歳代～40歳代	67	64	55	31
淋菌感染症	70	5.4	30歳代	39	61	58	57
メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症	356	50.9	20歳代～30歳代	60	103	102	109
ペニシリン耐性肺炎球菌感染症	23	3.3	70歳以上	64	34	23	44
薬剤耐性緑膿菌感染症	17	2.4	4歳以下	48	155	236	286
薬剤耐性アシネトバクター感染症	0	0.0	70歳以上	88	-	-	-





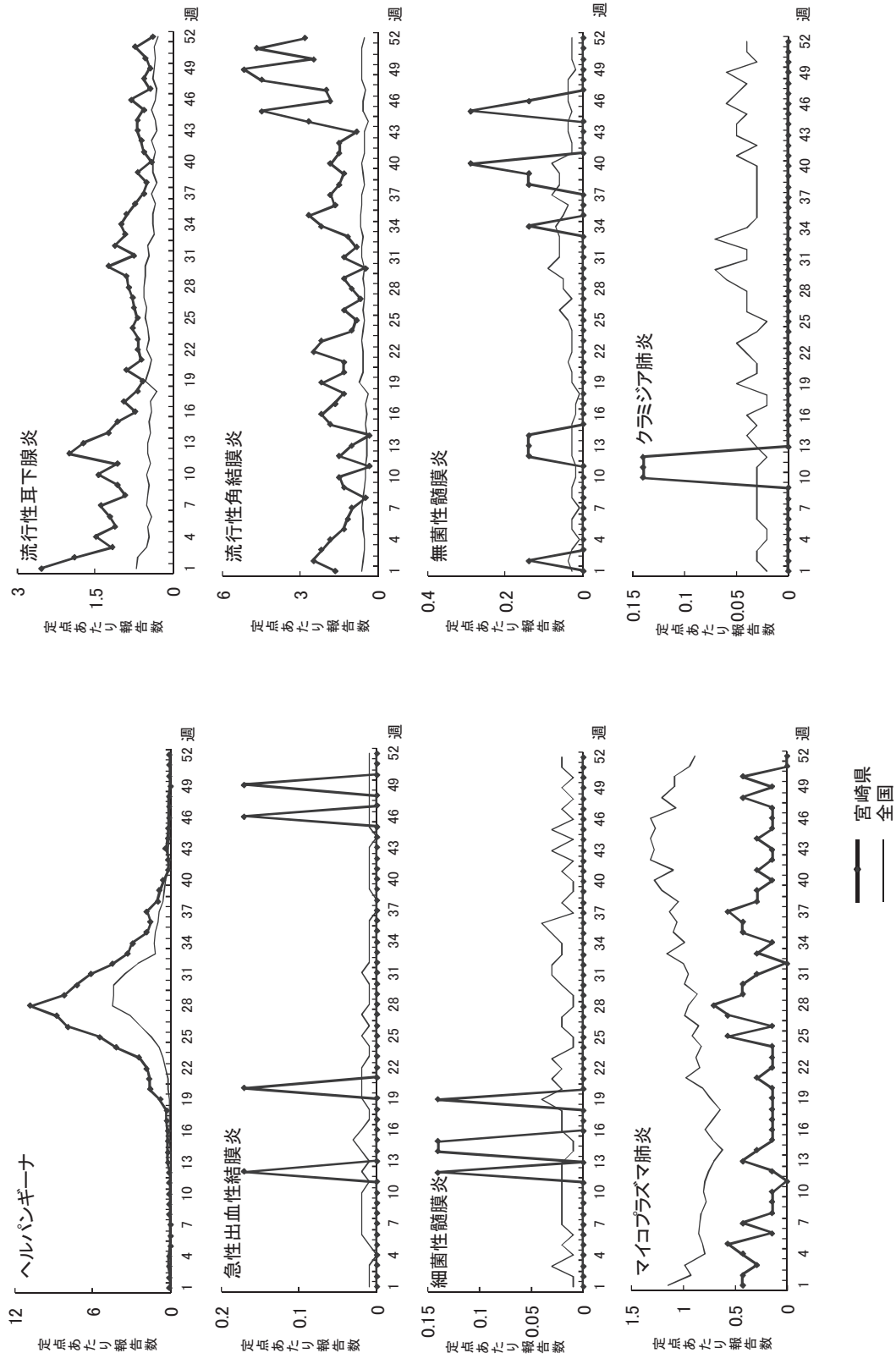


図1 定点把握対象疾患（週報告対象）の定点あたり報告数の週推移（経時発生状況）